

新刊紹介

續哲學叢書
第五編 社會學

新明正道著

社會學は未だに或一部の人々からは人間社會に於けるあらゆる現象を最も廣い範圍に於て全體的に研究する科學であるを考へられてゐる。尤もこれは所謂綜合社會學

の立場に於てはかく考へられ且つ研究された態度であり對象であつた。従つて現在でも此流れを汲む者が無い云ふわけではないから、普通の人々によつてかく考へられるのも無理からぬことであらう。然しかゝる立場に於ては一つの科學として社會學が成立することは極めて困難なることである。この立場そのものが統一ある組織を要求する科學の成立に對して矛盾を持つてゐるのである社會學が從來稍もするを否定されんことを此點であつた。かゝる時に際して社會學獨自の立場を對象を以て此綜合社會學に對抗して否認しこれを否定して新しき社會學樹立の旗の下に擡頭して來た一の大きな流れが

形式社會學派である。即ち人間社會生活に於ける人間關係そのものを研究對象として、これに伴ふ種々の志向等の所謂社會現象の内容はこれを除外したのである。従つて社會學の研究範圍は極めて小さく制限され且つ其處に社會學獨自の世界を見出し科學としての必須條件たる統一原理をも完全に所有することを得先輩諸科學中に己れの立場をも建設せんに至つたものである。

本書の著者は此形式社會學の立場に於て而も從來の綜合社會學始め種々の社會學體系の長所を考察に入れて茲に新しき社會學の指針を示さんせしものである。此意味に於て著者は序文に「本書は社會學への入門であるがその内容は單なる重要問題の概説ではなく、之を中心としてある組織を構成し……更に次の或は全く面目を一新するかもしれない社會學の試みに對して重要な標幟を成すものである」と云つておられる。恐らく本書に於て著者が努力されし點は素朴的な云ひ方ではあるが方法論に於ては綜合社會の歩みし路を對象論に於ては形式社會學の採れる態度を渾一融合して新見地を開かんせら

れしものであらう。即ち著者は「私は兩體系の綜合において初めて眞正なる且つ完全な社會學の體系が建設さるゝもの」を考へざるを得ぬ。如何にして兩體系の綜合を企圖すべきであるか。その試論こそ正に本書の内容を成すものである」云つて、これを社會學組織論方法論の二方面より研究をすゝめ組織論に於ては「一方において基礎に即した社會學、他方に於て社會現象に即した社會學の二つの部門」に分ち「前者」に於ては「特殊社會學の領域を」又「後者」に於ては「綜合新社會學の領域を包容」せしめんとせしものである。而して方法論に於ては著者は「私は對象を方法とを分離して考へ、凡ての方法は、如何なる對象にも適合するものを見る」云ひ又「私は社會的事象に就て一般化的方法の可能であることを説くが、この故に所謂個別化の方法を全然排除しようとするものでない」云つて前にも従來の兩説を融合せしめんことをされてゐる尤もそこには本書に引用されてある語句によつても知ることが出来る如く、ジンメル、フイーヤカント、ヴェーゼ、デュルケーム、ギディングス等の歐米社會學者の研究を

參照して著者の該博な知識を透徹せる研究が齎せる新しき多分の收獲を見ることが出来る。著者はかゝる見地に本論社會學内容論を社會(基礎)論と社會現象論に分ちて更に各篇を總説、本質論、構造論、法則論の四章にして詳述せられてゐる。かくて本書は社會學入門の初學者に於つても亦社會學研究者に於つても致ふる所大なるものあるを信ず。(岩波書店發行定價壹圓半)(三枝樹紹介)

西洋哲學史 第一卷 出 隆 著

哲學の入門的研究には概論風の研究も必要であるが概論では哲學上の幾多の問題ごとに、多くの哲學者の思索の結果を列擧してあるから、一哲學者の思想が問題別に分斷される。その分斷された思想がその哲學者の全思想中に如何なる位置を占めるか、さうして起つたか、他に如何なる影響を與へたかといふやうな事は哲學史によらなければ理解しにくい。つまり哲學史の知識がないと、概論は理解しにくいのである。進んで何かの問題を研究し、何人かの思想を研究するこなるに、哲學史的知識が